

個体レベル名詞・事態レベル名詞の区別についての認知言語学的考察

東京大学大学院

氏家 啓吾

keigo5525@gmail.com

1. はじめに

事象概念の関与する名詞の中には、関連する事象の個別事例（トークン）と結びつけて理解される名詞とそうでない名詞がある。たとえば「喫煙者」と「犯人」はいずれも指示対象の行う行為によって特徴づけられる名詞であるが、「喫煙者」は事象の特定の事例とは関係なく、習慣的にタバコを吸う人を表す。それに対して「犯人」は犯行事象の個別事例を念頭に置いてそれに行方者として参与した人物を表す。このような事象の個別事例に結びつけられた解釈を、本発表では特定事象解釈と呼ぶ。「喫煙者」は特定事象解釈を受けない名詞（習慣的・傾向的に解釈される名詞）であり、「犯人」は特定事象解釈を受ける名詞であると言える。

この区別は、生成語彙論の立場から扱われている。習慣的な解釈を受ける名詞ではクオリア構造の目的役割において、特定事象解釈を受ける名詞では主体役割において関連事象が指定されると分析される。

本発表では認知言語学の立場に立ってこの現象に新たな分析を与える。まずPustejovskyの生成語彙論の枠組みでの分析を概観して批判的に検討しそこには主体役割という概念の位置づけの問題、中立的解釈の問題、および解釈の予測の問題があることを指摘する。その上で、認知言語学の立場からカテゴリー化と概念の際立ちに着目した新たな見方を提示する。

第2節で生成語彙論による分析を概観し、第3節でその問題点、第4節で本発表の分析を提案する。第5節はまとめである。

2. 生成語彙論の分析

上述の区別に相当する名詞の解釈上の違いは、Rappaport Hovav and Levin (1992), Pustejovsky (1995), Barker (1998), Alexiadou and Schafer (2010), 宮島 (1997), 影山 (1999, 2002), Ono (2016) 等の先行研究で扱われている。以下では特に生成語彙論の枠組みに基づく研究を取り上げる。

2.1 先行研究の特徴づけ

Pustejovskyは個体レベル述語・事態レベル述語の区別を名詞に拡張し、その区別を名詞のクオリア構造の目的役割と主体役割によって表現することを提案している。physicist, linguist, violinistなどの名詞を「個体レベル名詞」(individual-level nominals; ILNs)、pedestrian, student, passenger, customerなどの名詞を「事態レベル名詞」(stage-level nominals; SLNs)と呼び、前者を役割を規定するもの("role-defining")、後者を状況によって規定されるもの("situationally defined")とした上で、次の例のように、前者は対象にその特徴が無い場合でも指すことができるのに対して後者は当該の述語に存在の力(existential force)が働いている場合にのみ対象を指すことができると述べている。

(1) The violinist is eating lunch at the cafeteria.

(2) The passengers are eating lunch on the plane. (Pustejovsky 1995: 229)

個体レベル名詞であるviolinistは(1)のように、ヴァイオリンの演奏という事象に指示対象がその時点において参与していない場合でも(食堂で食事を取っていても)適用できるのに対して、事態レベル名詞であるpassengerは(2)のon the planeで表されているように対象が乗り物での移動という事象に参与していなければ適用できない。

この区別を影山(1999)は次のように説明し、日本語の名詞に適用している。

- (3) violinist, physicistは、職業ないし専門家の名前であり、それぞれ「ヴァイオリンを演奏すること」「物理学を研究すること」を仕事(機能)としている。これらの機能は、それを辞めない限りは、恒常的に継続する。(影山 1999: 153)
- (4) passenger, customerは、職業や仕事とは言えない。乗客というのは、乗り物に乗っている時にしか成り立たない一時的な性質である。たとえば、Aさんがバスに乗るという状況を考えて、バスに乗っているあいだは「乗客」であっても、バスを降りて道を歩き出すと、もはや「乗客」ではなく「通行人」である。この点で、先ほどのviolinistやphysicistは違っている。violinistは、ヴァイオリンを演奏している間だけでなく、ふだん生活している時間においてもviolinistなのである。(影山 1999: 153-154)
- (5) 個体レベル名詞の例
教師、看護師、警官、パイロット、役者、踊り子、ピアニスト、市長、すもうとり、作家、画家、小説家、落語家、政治家、写真家 等
- (6) 事態レベル名詞の例
病人、被害者、飼い主、迷子、酔っぱらい、差出人、該当者、訳者、踊り手、金持ち、客、訪問者、犯罪者、乗客、歩行者、患者、観客、作者、踊り手、著者、落伍者 等
(影山 1999: 155-161)

つまり、個体レベル名詞はそれが表す性質が恒常的に成り立つのに対し、事態レベル名詞は関連する事象が持続している間のみ成り立つということである。ただし、事態レベル名詞が対象に適用できるのは厳密に関連事象が持続している間だけであるわけではない¹。影山が例として挙げている「被害者」に関していえば、ある事象が終結した後もその事象で被害を受けた人は被害者とみなせる。また「著者」も事態レベル名詞に含められているが、本を書き終わってから書き手はその本の著者であり続けるであろう。そのため本発表では事態レベルの解釈の特徴は事象が持続している間だけその性質が成り立つことではなく、事象の個別事例に結びつけて理解されることであるとみなす²。

この区別は文法にも反映される。英語の-er名詞では、特定事象解釈と基体動詞の項が補部とし

¹ Pustejovsky (1995: 239) はpassengerが当該事象の終了後にも適用できる場合の例を挙げて、この点に注意を促している。

(i) Hey, you're the passenger from my flight yesterday!

また宮島(1997)も「観客」がイベントの終了後にも適用されうることを指摘している。

² 他の先行研究における特定事象解釈の特徴づけを紹介しておく。Rappaport Hovav and Levin (1992) は、「イベント解釈」と呼び「事象の生起を前提としている」(presupposes that an event of grinding has occurred)などと特徴づけている。Barker (1998) は「エピソード的に結びつけられている」(episodically linked to the denotation of its stem)、Ono (2016) は「実際に関与している」(actually involved)としている。

て表現されることとの間に相関が見られることが知られている (Rappaport Hovav and Levin 1992)。職業や道具として解釈される場合には基体動詞の項が表現されない場合が多い (表現される場合には語の内部に組み込まれる; e.g. lifesaver) のに対して、特定事象解釈を受ける場合にはof句で表現される (e.g. saver of lives)。日本語の動作主名詞でも、「童話作家」「この小説の作者」のように同様の対比が見られるものがある (影山 2002)。

2.2 生成語彙論の分析

個体レベル名詞・事態レベル名詞の区別をPustejovskyはクオリア構造の違いとして分析している。これらは名詞に関連する事象がクオリア構造の中のどの役割で指定されるかによって区別される。クオリア構造とは生成語彙論で語彙項目の意味の一部として想定されている情報で、以下の4種類がある。

(7) 形式役割 (FORMAL role) : 他のものと区別する情報

構成役割 (CONSTITUTIVE role) : 構成する部分

目的役割 (TELIC role) : 目的や機能

主体役割 (AGENTIVE role) : 起源や成り立ち

目的役割はものの目的や機能の情報を担う。例えば「ナイフ」の機能は切ることであるため、次のように目的役割にその内容が記載される。

(8) 「ナイフ」

$$\left[\begin{array}{l} \text{形式役割} = \text{人工物 (x)} \\ \text{目的役割} = \text{yが、xを用いてzを切る} \end{array} \right] \quad (\text{影山 2002: 47})$$

主体役割はものの起源や成り立ちの情報を担う。例えば「パン」は焼くことによって生産されるため、次のように主体役割にそれが記載される。この情報によって、「パンを焼く」が生産行為として解釈されることなどが説明可能になる。

(9) 「パン」

$$\left[\begin{array}{l} \text{形式役割} = \text{物体 (x)} \\ \text{主体役割} = \text{yがxを焼く} \end{array} \right] \quad (\text{小野 2019 等を参考に作成})$$

Pustejovskyはこれらの概念を用いて個体レベル名詞と事態レベル名詞の区別を分析する。名詞に関連する事象が、個体レベル名詞では目的役割において指定され、事態レベル名詞では主体役割において指定される。violinistおよびpassengerの分析を影山は日本語の対応する名詞に適用している。

(10) 「ヴァイオリニスト」 (個体レベル名詞)

$$\left[\begin{array}{l} \text{形式役割} = \text{人間 (x)} \\ \text{目的役割} = \text{xがヴァイオリンを演奏する} \end{array} \right]$$

「乗客」 (事態レベル名詞)

$$\left[\begin{array}{l} \text{形式役割} = \text{人間 (x)} \end{array} \right]$$

主体役割=xが料金を払って乗り物に乗る (影山 2002: 47)

このように、職業や傾向を表す名詞における関連事象は道具名詞における機能と同じ扱いを受け、特定事象解釈を受ける名詞の関連事象はものの作られかたと同じ扱いを受ける。この分析は何を意味するのだろうか。影山 (1999) は次のように説明する。

(11) 目的役割は、実際の状況に関わりなく成り立つ、個体の恒常的な性質を示し、他方、主体役割は、その個体を個体ならしめている必要条件 (つまり、その場の成り立ち方) を示す。

(影山 1999: 154)

(12) violinistのような職業名は恒常的性質であるから個体解釈に相当し、pedestrianのような一時的性質を表す名詞は事態解釈に相当することになる。この違いをPustejoskyは特質構造で表すことを提案している。つまり、violinistのような職業は、その仕事をするを目的ないし機能としているから、目的役割が関わっている。[...] 他方、pedestrianというのは、道路を歩行するからそう呼べるわけだから、「歩行する」というのが主体役割を担っている。

(影山 1999: 154)

つまり、事態レベル名詞における関連事象を「成り立ち」として、人工物における生産事象などと同じものとみなす分析である。

3. 問題提起

3.1 主体役割の位置づけ

生成語彙論の分析は、個体レベル名詞と事態レベル名詞の違いを捉えることに成功しているかに見える。しかし、クオリア構造の主体役割という概念が首尾一貫した仕方で用いられているかどうか疑問が残る。

影山は上記 (11) の引用で「主体役割は、その個体を個体ならしめている必要条件 (つまり、その場の成り立ち方) を示す」と述べているが、この箇所の解釈には注意が必要である。名詞「パン」の意味にとっての焼くという事象は、パンの個体を生産する事象であるという意味で「その個体を個体ならしめている」と言ってよいであろう。しかし特定事象解釈の動作主名詞における関連事象は「その個体を個体ならしめている」とは言えない。「通行人」に関して言えば通行することが「その個体を個体ならしめている」わけではなく、通行することが「その個体を通行人ならしめている」のである。言い換えれば、特定事象解釈における関連事象はその参与者をその語の表すカテゴリーとする必要条件となっているのである。影山も上記 (12) の箇所ではpedestrianは「道路を通行するからそう呼べる」と述べている。「必要条件」「成り立ち」といった語があいまいに用いられていることによって、名詞の指示対象がどのように生産されるかということとカテゴリーの適合条件が混同されている。

さらに、事態レベル名詞であっても指示対象の生産事象の情報を持ちうることを考えれば、カテゴリーの適合条件となる事象を主体役割で指定する場合に生産事象の情報がどのように扱われるかという問題も生じると思われる。

以上のことは事態レベル名詞を主体役割の記載として扱う分析そのものが抱える問題であると思われるが、以下ではこの問題点を脇に置いて、上述の分析を受け入れた際になお残る問題を検

討する。

3.2 連続性と中立的解釈

道具名詞は対象の内在的機能と結びついていると想定されることが多い。小野（2005）は「一般的に言って、〈道具〉はそれが本来どのような目的のために作られたかが明確であるので、目的クオリアの属性は基本的に一義的に決まる」と述べている（小野 2005: 33）。しかし、道具名詞であることと対象の内在的機能を表すことは切り離して考えるべきである。実際、道具名詞の中にも特定事象解釈を持つ名詞が存在する。

影山は「はちまき」について「布を頭に巻き付けて初めて「はちまき」と呼べる」と述べ（影山 2011: 47）、(13a) に挙げた名詞を成り立ちによって規定される名詞とみなしている。個別の例については議論の余地があるが、例えば (13b) に挙げる「凶器」などの例は明確に特定事象解釈を受けると言えるだろう。

(13) 特定事象解釈の道具名詞

- a. はちまき、目隠し、猿ぐつわ（影山 2011: 47）
- b. 凶器、支え、おもし、仕切り

また、いずれの解釈も可能な例もある。例として「踏み台」を取り上げよう。この語はもともと踏み台として作られた物の類を表す対象の内在的機能としての解釈も可能であるが、別の解釈も可能である。電球の高さに手が届かないため、その場の機転で雑誌を束ねたものの上に乗って電球交換をしたとしよう。このとき雑誌の束を指して「踏み台」を使うのは不自然ではない。このように、対象の内在的機能によらず、上に乗って高所にアクセスするために使われてさえいれば踏み台とみなせるような解釈が可能である。ここでは名詞が関連事象の個別事例と結びつけて理解されているので特定事象解釈であると言える。このように両方の解釈が可能な道具名詞として次の例が挙げられるだろう。

(14) 両方の解釈が可能な道具名詞

踏み台、しおり、おもちゃ、武器、下敷き、寝巻き、まくら

ただし、これらの間にはっきりとした境界線を引くことはできないと思われる。また、「杖」や「机」などといった通常内在的機能として解釈される名詞も、文脈によって臨時的に特定事象解釈を受けることがある。したがって、特定事象解釈がほぼ不可能な名詞から、多義的なもの、義務的に特定事象解釈を受けるものまで連続体をなしていると見るのがよいであろう。

さて、生成語彙論の立場では (13) や (14) に挙げた名詞について、特定事象解釈を受けることを理由に関連事象を主体役割に割り当てることになる³。実際、影山（2011: 47）は「はちまき」の

³ この点に関連して本発表の応募要旨に対する査読で次のようなコメントをいただいた：「これが生成レキシコン理論で取り扱えない現象であるとの著者の主張は、生成レキシコン理論に対する誤解に基づいているように思える。というのも、語の特質構造をモノに対する臨時的な属性として扱うことは特に問題ないからである。「本の束を踏み台として用いる」場合、「本の束」に踏み台としての臨時的なTELIC属性があるかどうかを評価することは十分可能である」

これは「踏み台」の関連事象を一貫して目的役割に割り当てておき、特定事象解釈を受ける場合には、対象（本の束など）が臨時的に「踏み台」の目的役割に対応する機能を持つものとみなされていると考えればよい、という提案であると理解した。この考えに従えば、「乗客」と「踏み台」の特定事象解釈を、事象への参与によってそう

主体役割に「人がxを頭に巻いて結ぶ」という内容を記載している。また、「踏み台」のような多義的な名詞については、内在的機能解釈の時には目的役割に、特定事象解釈の時には主体役割に関連事象を割り当てることになるであろう。

しかし、そうすると問題が生じる。次の文では内在的機能解釈と特定事象解釈の区別を考慮しない中立的な解釈が可能である。

(15) あの先生は背が低いので講演の時には必ず踏み台に乗って話す。

(16) 彼は毎度しおりを落としてしまう。

ある会場ではもともと踏み台として作られた踏み台を使い、別の会場ではその辺にあったものを使うという場合でも (15) は適切であると思われるし、ある時にはしおりとして作られたしおりを、別の時にはしおりとして使っていたレシートを落とすという場合でも (16) は適切であると思われる。目的役割・主体役割の2分法によって名詞の2つの解釈を区別するならば曖昧 (ambiguous) になることが予想されるが、実際には中和した解釈が可能なのである。この事実が示唆するのは、これがレキシコンでの語彙項目ごとの規定による区別ではない可能性である。

3.3 名詞ごとの予測

道具名詞の中でも「ハサミ」「ホッチキス」等は常に内在的機能解釈を受けるのに対して、前節で見たように「踏み台」「しおり」などは特定事象解釈が比較的容易である。特定事象解釈されやすさの階層は、概略次のようになっている。

表1 道具名詞の特定事象解釈の可能性

名詞	特定事象解釈
ハサミ, ホッチキス	不可能
杖, 机	文脈により可能
踏み台, しおり	容易に可能
凶器, 支え	義務的

現象を理論的に言い換えるだけでなく、このような名詞ごとの違いを予測できることが望ましい。

4. 認知言語学の立場からの説明

4.1 カテゴリー化

特定事象解釈を説明するには、カテゴリー化の働きを考慮する必要がある。カテゴリー化とは対象を何かとみなすことである (cf. Langacker 2008: 17)。本発表では、特定事象解釈はある対象が事象の個別事例において当の働きをしたことに基づいて名詞の表すカテゴリーの成員とみなされることによると提案する。雑誌の束に乗って電球交換をした場合、雑誌の束はその事象の中で

みなされるという点では同じであるにもかかわらず一方は主体役割によって、他方は目的役割と臨時的評価の組み合わせによって扱うことになる。「司会者」「指揮者」など動作主名詞の中にも多義性を見せる名詞が存在することを考えると、それにより動作主名詞との類比性を捉えられなくなる可能性がある。また、「凶器」のようにほぼ常に特定事象解釈を受ける名詞については、内在的機能として目的役割に措定した上で毎回臨時的に評価される、と考えることは不合理であるように思われる。「凶器」を主体役割によって扱う場合、「踏み台」と「凶器」の間のどこかで恣意的に線を引くことになるだろう。

特定の働き（名詞「踏み台」に結びついた働き）をしたことに基づいて、踏み台というカテゴリーの成員とみなされる。そのため文の中でそれを「踏み台」と呼んだ場合にはその事象と結びつけて解釈されるのである。つまり特定事象解釈は、レキシコンの中での語彙項目の規定によるものではなく、個々の使用場面でのカテゴリーの適用に関わるものである⁴。このように考えれば、前節でみた「踏み台」の中和した解釈も問題にならない。

対象が事象の個別事例に特定の仕方で参与したことに基づくカテゴリー化（以下「関係的カテゴリー化」）は広汎に見られる現象である。例えば次の例では、ある対象が事象の事例に特定の仕方で参与したことに基づいてその対象を「手がかり」「きっかけ」としてカテゴリー化している。

- (17) a. 指紋を手がかりに犯人を捜索している。
- b. あの事件をきっかけに対策が規制が進んだ。
- c. 好景気を追い風に、店舗数を増やした

(17c) の「指紋」の指示対象は、主節の表す捜索事象において特定の働きをしていることに基づいて「手がかり」としてカテゴリー化されている。また、(17c) の「追い風」の比喩的な使用も関係的カテゴリー化の例である。このような「XをYに」が従属節として働く「地図をたよりに構文」（三宅 2011, 氏家 2017など参照）は、特定の事象での働きに基づいてXをYとしてカテゴリー化することを表す。つまりこの構文ではYの名詞が常に特定事象解釈を受けるのである⁵。道具名詞「踏み台」や「杖」を使った次の例も同じ仕組みによる（氏家 2017）。

- (18) 雑誌の束を踏み台に電球を交換した。
- (19) 折れた槍を杖に、なんとか歩いた。

個体レベル名詞・事態レベル名詞という名詞の区別として捉えられていた現象は、「手がかり」などの語や「追い風」の比喩にみられるような関係的カテゴリー化という一般的な現象の表れである。

4.2 概念の際立ち

関係的カテゴリー化と意味の間にはどのような関係があるのだろうか。この点については、言語表現の意味構造における概念の際立ちに着目することが有用である。

「犯人」や「凶器」などにみられる特定事象解釈では関連事象の特定の事例が参照されるのに対して、「喫煙者」や「ナイフ」にみられるような習慣的あるいは内在的機能解釈では、関連事象関与するものの、事例のレベルではなくタイプのレベルにおいてのみ対象を特徴づける。

認知文法では、このようなタイプ／個別事例の区別と「際立ち」（prominence）との相関関係が指摘されている。Langacker (2006) は古典ナワトル語の名詞抱合の例を取り上げている。「食べる」

⁴ ただし、本発表では使用基盤モデルの立場を取っている。この立場では個々の使用場面のあらゆる側面が定着・慣習化を通して言語知識の一部となりうると想定されるため、ある名詞が特定事象解釈を受けるかどうかは語彙項目に関する知識の一部となることを否定するものではない。

⁵ このため、特定事象解釈の不可能な名詞はこの構文のYの位置には現れない。例えば「部屋」は特定事象解釈を受けないため、「～を会場に」は可能だが「～を部屋に」は不自然である。

にあたる動詞 k^waa は2項動詞であり、対象は補部名詞句として現れる。一方、対象を動詞に組み込んで「肉-食べる」 $naka-k^waa$ とすると1項動詞となり、対象を補部にとらなくなる。「食べる」の意味においては対象概念の際立ちが高いため、言語表現上対象が個体を指す補部名詞句として表現されるが、「肉-食べる」においては対象概念は行為をタイプのレベルで特徴づけるのみであるため際立ちが下がり、補部名詞句として現れることがなくなるのである。日本語の「読む」と「読書する」の間にも同様の関係が見られる。「読む」の意味においては対象概念の際立ちが高く、それゆえ(20a)の「あの本」のように個体を表す補部名詞句として現れる。一方、「読書する」においては対象概念が行為をタイプのレベルで特徴づけるのみとなるため相対的に際立ちが低くなり、1項動詞となる。

(20) a. 昨日あの本を読んだ。

b. 昨日2時間読書した。

名詞についても同じように分析できるだろう。名詞の意味における事象概念の際立ちが高いほど、関連事象が個別化された解釈を受けやすく、つまりその事象への参与に基づいてカテゴリー化されやすいのだと考えられる。「ナイフ」における事象での働きの概念は際立ちが低くタイプレベルで物を特徴づけるのみである。それに対して「凶器」における事象での働きの概念は際立ちが高く、個別化される。

このように考えると、Rappaport Hovav and Levin (1992) の指摘している特定事象解釈とofによる補部表示の対応も説明できる。職業解釈となるlifesaverにおける名詞lifeはタイプ概念として行為を特徴づけているにすぎないのに対して、特定事象解釈のsaver of livesにおける補部livesは個別事例を指す名詞句である。

目的役割・主体役割は2つに1つであるのに対して、際立ちは連続的な概念であるため、前節で見たような特定事象解釈のされやすさの連続体をなすことも自然に理解できる。

4.3 働きの特定性

残る課題は、どのような道具名詞が特定事象解釈を受けやすいかという問題である。表1に示した階層は、働きの指定の特定性と相関していると考えられる⁶。

働きの指定が特定のであればあるほど、内在的属性が規定される。働きの指定が特定のであれば様々なものがその働きを果たしうることになる。例えば「ハサミ」の指定された働きは「切る」ということだけに尽きず、言わばハサミ的に切ることだと言える。ハサミ的に切るという特定の働き指定を実現するためには、2枚の刃が重なった形状など一連の内在的属性を備えていなければならない。それゆえそのために製造された物以外がその働き指定を満たすことは難しい。そのため、特定の事象に基づいてカテゴリー化される余地がない。一方、「踏み台」の指定された働き(上に乗って高所にアクセスする)はそれほど特定のなものではない。それゆえ、対象の内在的属性を規定しないため、様々なものが当該の働きを果たし、そのことに基づいて踏み台としてカテゴリー化されるのである。このため、働きの指定が抽象的な名詞ほど特定事象解釈を受けやすいのである。

また、特定事象に基づくカテゴリー化の例として挙げた「手がかり」「きっかけ」などの名詞

⁶ 本節の内容は氏家(2020)に基づいている。

は対象についての具体的な指定がない。これは働き指定の抽象性スケールの先に位置するものとみなすことができる。それゆえこれらの名詞は常に特定事象解釈を受けるのである。

以上のように、名詞の特定事象解釈の可能性は働きの指定の特定性・抽象性の観点からある程度予測することができる。

5. まとめ

名詞の特定事象解釈の問題について、生成語彙論の分析を批判し、認知言語学の立場から、以下のことを主張した。

- (21) i. レキシコンにおける区別ではなく対象へのカテゴリーの適用の問題である。
- ii. 関係的カテゴリー化は広汎に見られる現象である。
- iii. 関係的カテゴリー化の可能性は名詞の意味の中での事象概念の際立ちと相関している。
- iv. 働き指定の抽象度が高い名詞ほど特定事象解釈を受けやすい。

参考文献

- Alexiadou, Artemis and Florian Schäfer (2010) On the syntax of episodic vs. dispositional -er nominals. Artemis Alexiadou and Monika Rathert (eds.) *The syntax of nominalizations across languages and frameworks*. 9–38, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Barker (1998) Episodic -ee in English: A thematic role constraint on new word formation. *Language* 74: 695–727.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京: くろしお出版。
- 影山太郎 (2002) 「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』53, 44–55.
- 影山太郎 (2011) 「モノ名詞とデキゴト名詞」影山太郎 (編) 『名詞の意味と構文』36–60. 東京: 大修館。
- Langacker, Ronald W. (2006) Dimensions of defocusing. Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama (eds.) *Voice and Grammatical Relations*. Amsterdam: John Benjamins, 115–137.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford University Press.
- 宮島達夫 (1997) 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』157–171. 東京: ひつじ書房。
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』東京: くろしお出版。
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』東京: くろしお出版。
- 小野尚之 (2019) 「Generative Lexiconによるレキシコン研究」岸本秀樹 (編) 『レキシコンの現代理論とその応用』153–175. 東京: くろしお出版。
- Ono, Naoyuki (2016) Agent nominals. In: Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese lexicon and word formation*. 599–629. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Rappaport Hovav, Marka and Beth Levin (1992) -er Nominals: Implications for a theory of argument structure. In: T. Stowell and E. Wehrli (eds.) *Syntax and semantics 26: Syntax and the lexicon*. 127–153. New York: Academic Press.
- 氏家啓吾 (2017) 「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38: 287–301.

2020/09/12 Morphology & Lexicon Forum

氏家啓吾 (2020) 「「接しかた」と名詞の意味論」日本認知言語学会第21回大会での口頭発表.